

遠峰四郎先生のこと

遠峰四郎先生が平成十八年一月に亡くなられたことを知ったのは、この追悼記事の執筆依頼の電話が、先生の後継者である富田広士教授からかかってきた同年十一月下旬のことであった。電話で話しながら思い浮かべていたのは、生前の遠峰先生のいつも変わらぬ温顔であった。先生は常に穏やかで、不愉快そうな表情など見たこともなかった。

遠峰先生は大正四年の生まれであるので、昭和八年生まれの私とは十八も年が離れている。また、同じ地域研究グループに属してはいたが、先生のご専門がイスラーム法であったので、アフリカ現代政治が専門の私とは、学問上の接点はあまりなかった。

本来それではいけなかったのである。アフリカはサハラ以北はもちろん、サハラ以南でも、西アフリカ、中部アフリカ、東アフリカにかなり深くイスラームが浸透している。従って、むろん問題にもよるが、「イスラーム

とは何か」が分からなければ、バランスのとれた研究は期待できない。とりわけ、ポスト冷戦時代に入って以後は、アフリカ地域研究におけるイスラーム問題の重要性は高まる一方である。とくに二〇〇一年の九・一一米国同時多発テロ事件以降は、イスラーム問題の確かな認識なしには解明できない問題が、アフリカには数多く出現している。時計の針を何十年分か戻して法学部の現役時代に立ち返り、遠峰先生にイスラームについていろいろと教えを請いたい気分である。

さきほど、学問上の接点はあまりなかったと書いたが、まったくなかったわけではない。遠峰先生と私との最初の学問的会話は、私が法学部助手に残った昭和三十七年に初めて『法学研究』（三五巻九号）にヴァティキオテイス（P. J. Vatikiotis）の *Egyptian Army in Politics* の書評を載せたとき、まさにその書物の表題の通り、エジプトの軍隊の政治介入、政治的役割などについて、交わされたものであった。当時、私はアフリカにおける軍部の政治介入の問題に関心を持ち始めていたので、ヴァティキオテイスのこの本を取り上げたのだが、恐らく遠峰先生は、サハラ以南のアフリカを研究対象にするものと思っていた新人の助手が、エジプトの政治と軍部の問

題に関心を寄せたことが、少し嬉しかったのかもしれない。その後、私が『法学研究』に発表した論文などについて、第一研究室の談話室で出会ったときなどに手短なコメントを下さったりした。

遠峰先生とともに共同研究に参加したこともある。法学部内に昭和四十一年に組織された「地域研究グループ」の共同研究がそれで、奇しくもこれまた「政治と軍部」が統一テーマであった。同じ年、政治学科にまず「政治学共同研究委員会」が設置され、学科内で共同研究を盛んにしようというその趣旨に沿って、いち早く組織されたのが、地域研究グループだったのである。「政治と軍部」についてのこの共同研究の成果は、昭和四十三年三月には(慶應義塾大学地域研究グループ編)『変動期における軍部と軍隊』(慶應通信)として出版され、日本におけるパイオニア的研究としての価値を認められたように記憶している。遠峰先生は「イラン、イラクの軍部・軍隊と政治」と題する論文を執筆され、両国における軍隊の創設・発展とその近代化、そして軍部エリートが次第に政治化していく過程を、簡潔に述べておられる。同書の執筆者は、遠峰先生と巻頭論文を書かれた内山正熊教授を除けば、あとは十五から二十幾つも年の離

れた、ほとんどが三十代の若手ばかりであったが、よく溶け込んで下さって、協力を惜しまなかった。

なお、地域研究グループは同じ昭和四十三年九月に D・E・アプター編『イデオロギーと現代政治』(慶應通信)を翻訳出版しているが、遠峰先生は担当した論文の訳業のほかわれわれ訳者を代表して「訳者まえがき」を執筆しておられる。そうした次第で、この時期、比較的遠峰先生と接する機会があったせいも、日本オリエント学会への入会を勧められる場面もあったが、私は煮え切らない返事をしたままで、結局その話は立ち消えになった。

さて、話は突然五十年ほどさかのぼる。私の大学時代のクラスメートの一人が、結核にかかって休学し、一年遅れて卒業の時を迎えた。病後で体調が万全でなかった彼は、卒業に必要な最小限の単位取得で済ませるつもりでいたところ、勘違いで、このままでは単位不足となり卒業できないという、一大危機に直面した。そこで助けを求められた私は(当時社会人であったことの気安さも手伝って)、急遽、当時兼任講師であった遠峰先生担当の「政治学科特殊講義(アラブ圏事情)」のリポートの「原案」を作成し、彼がそれを参考にリポートを纏め上

げて提出、なんとか卒業に漕ぎつけたのであった。これ
でますます深まった彼との友情は、いまでも変ることな
く続いている。遠峰先生が施して下さった功德のひとつ
であるかもしれない。いま、遠峰先生のご冥福を祈りな
がら、そんなことを思い出している。

(二〇〇六年十二月十七日・記)

小 田 英 郎

遠峰四郎先生を憶う

遠峰四郎先生は、私が教えを受けた大先輩である。先生は暖かい心の持ち主であった。自らも年をとつてみると、私が先生の講義を聴いていた時の先生の心境の一端がわかってくるような気がする。

私が聴いた先生の講義は、「中近東論」と「イスラム法」であつたと思う。先生は淡々と話をされる。凡庸な学生はそれを退屈と感じ、そこで終る。私はそうではなかった。

当時、そして今でもそうであるかもしれないが、法学部政治学科の教育内容は圧倒的に西洋の学問が中心であつた。そのような雰囲気の中で、私は中国が西洋と違ふと感じ、思いをめぐらしていた。遠峰先生はよくアラビア文字を黒板に書き、イスラム法の概念がいかに西洋の法と違ふかを説かれるのを聞き、私には大いに共感するところがあつた。

私が先生の講義を聴いていた時代は、学生運動華やかな頃であつた。学生の政治行動の過激さと軽薄さに対し

て、先生は戦中に経験した困難に鑑み自らの強さを強調されていたことが、私の記憶に残っている。当時私はそのことを良く理解することができなかったが、戦中・戦後の先生の経歴を拝見して、今になってわかつてきたような気がする。

先生に日頃接するなかで、「名利を求めず」という先生の態度が良く伝わってきた。人間である以上常にそうであつたかどうかわからない。しかし、先生はいつも若い私に声をかけ、励まして下さつた。三田を去られて松阪大学に行かれてからも、会うたびに「やあ、山田さん元気」と声をかけて下さつたことが、今でも耳に残っている。そのような先生を慕つて、多くの学生が先生のゼミに集つてきた。先生のゼミの卒業生の会を開いた時、先生が都合で出席できなかったために、私が遠峰ゼミの卒業生の会に「友情出演」したこともある。その時、卒業生を通して、先生の暖かいお心が伝わってきた。

いまだにイラク、イランをめぐり国際政治が緊張している。先生が生きておられたら、そのような情況についてどう語られたであろうか。お伺いしたいところである。

山田 辰雄

遠峰先生と私

遠峰先生は二〇〇六年一月二九日、ご逝去になられた。謹んでご冥福をお祈り申し上げたい。先生には、一九七六年四月「現代中東論」（現在は「現代中東論」と呼ばれている）担当の法学部助手になって以来、足掛け三〇年にわたり、公私を問わず様々な面でご教授いただいた。

助手になった当初、それまで石川忠雄先生のところで中国政治をやっていた私は、イスラームに関する基礎知識、アラブの歴史、ユダヤ人の歴史などの代表的な文献を指示していただき、しばらくして研究室棟七階の先生の研究室を訪ねては、先生に時には的外れな質問もぶつけていた。そんな時、先生は「そうねえ……」といつも丁寧に切り返されて、中東地域を政治学から研究する際にイスラーム理解を忘れてはいけないと再三再四いわれた。しばらくして、私は一九七九年から八一年にかけ、カイロで二年間生活しながら、カイロ・アメリカン大学で

アラビア語を勉強した。私はその時まで強い親西欧主義者であったので、自然関心はエジプトの貧困、近代化の阻害要因に向けられ、気がついてみると開発（development）という視点からエジプトの開発をめぐる政治史をやるようになっていた。先生は「このテーマは重要だからやるように」といわれ、それでもイスラーム理解の大切さは折に触れ繰り返された。

その後も私は「開発」への関心を持ち続け、一九九〇年代には John Waterbury などの研究に基づき、アラブ諸国を越えて、トルコ、イランまでカバーして、開発戦略の諸相を「現代中東論Ⅱ」で講義し、今に至っている。この間先生とのレッスンは先生のお宅に場所を移して続いた。年一回お正月であったり、二、三年、間が空いてしまうこともあった。自分がその時にやっていたこと、中東情勢、日本の中東理解など、話題は尽きなかった。私の現地経験の方も一九八七年から八八年にかけてのヨルダン、一、二年に一度のエジプト出張など、横上げを続けていた。

先生とのお付き合いのせいなのか、現地体験の積上げのせいなのか、二〇〇〇年前後から自分を越えた力が少しずつではあるが、私の中の硬い親西欧主義を溶かしは

じめた。三大宗教間の協調・対立、中東の文明と西欧文明の関係、地中海文化圏の中の相互影響、アラビア語の繊細さ・原理性、アイデンティティの複合性など、現在のアメリカに見る物質・技術の先端性とは別の中東文明が持つ凄さに気がつきはじめた。インターネットと金融資本主義によって覆いつくされた観があるグローバル化世界において、人間信頼がここまで傷ついた現在、次の時代をどう切り開いたらよいのか。次の時代の人間の生き方、人と人との繋がり方の手本は、ひょっとしたら

中東の人たちの日常的な生活、思索を子細に検討することによって得られるのではないのかという思いが湧いてくる。もちろんアイデンティティ複合にあやかっ、私はまだ中程度の親西欧主義者にもとどまっているのだが。残念なことに、日本を含む先進工業諸国の中東・イスラーム理解は、遠峰先生が注意を喚起されたような平和的な形ではあまり進んでいない。ムスリム労働者の国際移動、二〇〇〇年以降のアル・アクサー・インティフアーダ、9・11、イラク戦争など、過酷な現実政治を目前に突きつけられることによって、否応なく見方の変更を迫られている感が強い。

先生、有難うございました。浅才な人間ですが、これ

から研究者の端くれとして、何とか自分の研究をまとめます。いつもの「そうねえ…」で結構ですので、見守っていただけたら嬉しいです。

富田 広 士